

第十一回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

嶋田 義仁 著『稲作文化の世界観 「古事記」神代神話を読む』
(1998年3月18日 平凡社 刊)

嶋田 義仁 しまだ よしひと 昭和24年(1949)生まれ。山梨県出身。専攻は宗教学・民族学・人類学。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科宗教学専攻博士課程修了。フランス社会科学高等研究院アフリカ研究センター留学。同研究院民族学博士。静岡大学人文学部教授(受賞時)。現在、名古屋大学大学院教授。著書は、『異次元交換の政治人類学』、『牧畜イスラーム国家の人類学』、『優雅なアフリカ』がある。

受賞のことば

サハラ以南を旅する中で、受賞の報らせを受け取りました。私の「砂漠」研究も二〇年になります。その私がどうして『稲作文化の世界観』なのか。その謎は和辻の風土論がすべて説明します。『風土』は思想まで含めた日本人の生がアジアのモンスーン風土に強く規定されたものであることを明らかにするとともに「牧場」のヨーロッパや「砂漠」の世界があることを二〇才の私に教えました。とくに「砂漠」の存在を日本人にはっきり認識させたのは和辻ではないでしょうか。「牧場」や「砂漠」の風土を生きる中で、モンスーンアジアのわれわれの文化と思想も考えてみたい。外国旅行など夢の時代であった二〇才の頃、和辻が私に抱かせたこの遠大な夢を一そして和辻自身その時代的制約から果すことのできなかつたこの夢を、私は生きてきたように思います。

同時に今私は、和辻の思想に流れるリズムを理解できます。和辻は風土に安らぐことの幸せを、風土に安らぐことのできなくなった時代の目で、見つめつづけたように思います。「砂漠」の世界も例外ではありません。風土を離れて漂流しはじめた現代人の行く末を、これから様々な風土の世界の人々とともに案じてゆくことになるでしょう。

《選考委員評》

人間の学

陳 舜臣

『古事記』はじつに魅力的な物語である。本居宣長以来「研究」の名に価する著作は多く、日本の知識人の前に、『古事記』はつねにスフィンクス的存在であった。

神話学といわれる分野でも、世界的にボーダーレス化し、今までのように国史学や国文研究の範囲から大きくひろがった。『稲作文化の世界観』の著者嶋田義仁氏は、学界のこのような動向の最先端に位置する人といえる。

スサノオ神話が南米アマゾンの原住民の伝える説話と類似していることを指摘したのは構造人類学者のレヴィ・ストロースであった。嶋田氏はベルグソンの道徳・宗教論とレヴィ・ストロースの神話学との比較研究を、修士論文とただけあって、レヴィ・ストロースから大きな影響を受け、それから脱却することにけんめいな努力をされたことが、その著作からもよくわかる。

和辻哲郎は倫理学にも「人間の学としての」ということばをかぶせている。梅原猛は「原・古事記」の作者の一人が柿本人麿であると推論したが、嶋田氏はこれまでの神代神話研究に欠けていたのは、こうした人間への注目であったとする。

嶋田氏は神代神話の構造を分析し、そこにかくされた理論体系も、稲作という日本人のいとなみに密着しながら問われた生と死の謎をめぐるものであることをあきらかにする。

気宇壮大な人間の学問がここに展開されている。神話に登場するキャラクターの息吹が読者の頬を撫で、読者の胸を揺りうごかせる。作者のめざすところは、灌漑稲作文化をこえて、牧畜文化の人間の学にまで及ぶ。

大きな期待を抱いて、嶋田氏のつぎの新しい著作を待ちたいと思う。

梅原 猛

予選に残った候補作の中から、私は、当選作になった嶋田義仁氏の『稲作文化の世界観』とともに、山本ひろ子氏の『異神』と前田耕作氏の『ディアナの森』の三点が心に残った。山本ひろ子氏の『異神』は、今まで総合的にはほとんど光をあてられなかった中世の世界にうごめく神々に異常というべき研究の情熱を注いだ野心作であり、前田耕作氏の『ディアナの森』は、現在日本において類稀な古典について知識をもった著者がフィールドを交えて神々の話を語った興味深い作である。両作とも私の心を打ったが、山本氏の場合は、いまま少し表現をやさしくしてほしいという希望があり、前田氏の場合は、叙述に少し陰影をつけてほしいという不満があった。

嶋田義仁氏は、彼が京大時代に私が教えた学生であり、多少遠慮していたが、陳氏及び中野氏の強い推薦があって、受賞が決まった。もとより私に異論があるはずはない。

嶋田氏はレヴィ・ストロース批判などで国際的にも著名な学者であり、アフリカ研究でも活躍している。この『稲作文化の世界観』は、氏が本格的に日本研究に取り組んだ第一作であるが、今まで稲作文化を世界観として総合的に取り上げる学者はいなかった。視野は広くしかもところどころに著者の創見がある。長年、日本のことを研究してきた私としては、この才能豊かな、しかも強い学問への情熱をもつ後輩に対して、いろいろ言いたいことはあるが、今回の受賞については心からの拍手を送りたい。

和辻哲郎文化賞は、和辻哲郎の賞である。欲を言えば、和辻哲郎のようなすぐれた仕事をする人に受賞してもらいたいと思っているが、従来の受賞者は歳の多い人もあり、和辻と甚だ専門の異なる人もあり、必ずしもそういう期待を抱けるとはかぎらなかった。嶋田義仁氏は和辻の教えていた京都大学の哲学科が生んだ久しぶりの大器である。今後西洋と東洋あるいは日本にまたがって、和辻のような仕事をしてもらいたいと思っている。

中野 孝次

今年は少々論議をせねば片付くまい、と覚悟してわたしは家を出た。というのは、本年残った候補作はどれも力作ぞろいで、どれか一つが特出しているということがなかったからである。去年は徳永恂『ヴェニスへのゲッターにて』、一昨年は長谷川三千子『バベルの謎』ですんなり決ったが、今年はそんなうまい具合に行きそうになかった。

しかし選考会が始ってみると、案ずるまでもなく比較的すらすらといった。

初めに梅原氏が推したものは、五点中一番の大作で、大変な努力作であるのは誰も認めるが、文章に難があった。部分に集中し、論の進め方が読者をひきつける魅力に欠ける。その欠点を陳氏が指摘し、わたしも同意見の旨を述べたのに対し、梅原氏があっさりひっこめたのは、やはりその弱点を見ていられたのであろう。そして代りに陳氏がすすめたのが嶋田義仁『稲作文化の世界観』で、これはわたしも推そうと思っていたものだったから賛成、梅原氏も賛成で、抵抗なくこれに決定した。

古代神話にわたしはまったくうとい者だが、そういう素人をも納得させる力が嶋田氏の著書にはあった。古代神話における“作偽”問題を取上げ、どこまでが本来の伝承神話で、どこがイデオロギー上の作為かを論じる。その分析と論旨が明快で、一種の知的興奮さえ覚えた。外国の有名学者の説を引いても、自己の立場からの明確な批判がある。

「これまでの神代神話研究に欠けていたのはまさにこうした人間への注目である。」

これが氏の主張の根本にあるもので、だから読んで気持ちいいのである。